

# レディ・チャタレー

2007(平成19)年11月5日鑑賞〈角川映画試写室〉

★★★



監督・脚本・台詞＝パスカル・フェラン／原作＝D.H. ロレンス『チャタレー夫人の恋人』  
／出演＝マリナ・ハンズ／ジャン＝ルイ・クロック／イポリット・ジラルド／エレーヌ・アレクサンドリディス／エレーヌ・フィリエール／ベルナルド・ヴェルレー（ショウゲート配給／2006年フランス映画／135分）

## 第1章

映画は監督で観る！

……チャタレー裁判の有罪判決確定から50年。「20世紀最高の性愛文学」が4度日本に上陸！ なぜ、イギリスの小説がフランスで……？ それはやはり『エマニエル夫人』（74年）を生んだ国の特性……？ しかも、今回は女性監督だ。もっとも、そのストーリーは至って単純で、『エマニエル夫人』は既に古い……？ さて今や、渡辺淳一の『失楽園』（97年）、『愛の流刑地』（06年）そして団鬼六の『花と蛇』シリーズ、『紅薔薇夫人』（06年）、『鬼の花宴』（07年）などを見馴れた、あなたの興奮度と性愛満足度は……？



## あれから50年……

私が司法試験に合格したのは1971年。この当時、憲法の「猥褻罪か表現の自由か」というテーマで勉強したのがチャタレー裁判。イギリスの小説家D.H. ロレンスの小説『チャタレー夫人の恋人』を伊藤整が翻訳した日本版『チャタレー夫人の恋人』が日本で発売されたのは1950年4～5月のこと。その当時15万部のベストセラーになったらしいが、この小説は猥褻文書頒布罪で発禁処分となり、翻訳者と出版社が起訴され、「猥褻か芸術か」というテーマで世間の注目を集めた。もっとも、1950年は私が生まれた1949年の翌年だから、そんな論争を1歳の私が知る由もなく、私が1972年の司法修習生時代に体験したのは、一条さゆりの「濡れた欲情」事件。

それはともかく、世間の注目を集めたこのチャタレー裁判は、1950年9月に起訴された後、1952年の第一審、第二審判決で共に被告人有罪とされ（第一審は出版社のみ有罪で翻訳者は無罪）、さらに1957年3月最高裁は上告を棄却したため有罪が確

定した。したがって2007年の今は、あれから50年。そんな中4度目のチャタレー映画の登場だ！

## セザール賞5部門の受賞だが……

この映画は2007年2月に発表されたフランスの第32回セザール賞で、作品賞、主演女優賞、脚色賞、撮影賞、衣装美術賞の5部門を受賞したとのこと。しかし考えてみれば、フランスを代表する性愛映画は『エマニエル夫人』であり、イギリスを代表する性愛映画が『チャタレー夫人の恋人』だったはず。

ところが、この手の性愛映画にかけてはやはりイギリスよりもフランスの方が1枚上……？ 3度目の映画化（1993年）こそ製作はイギリスだが、これは本来テレビ用に作られた作品。1度目（1955年）は完全にフランス製作だし、2度目（1982年）も『エマニエル夫人』で全世界的に有名になったシルヴィア・クリステルを主演させた、イギリス、フランス合作映画。しかして、4度目の映画もフランスが……。このような「実績」をみれば、性愛映画については完全にイギリスよりもフランスが上だから、原作者のイギリス人作家D.H. ロレンスも草葉の陰で苦笑しているのでは……？

他方、今でこそヨーロッパはユーロを共通の通貨としてよくまとまっているが、そもそもイギリスとフランス（と、あえていえばドイツ）は長年対立を続けていた国同士。したがって、イギリス人作家D.H. ロレンスの超有名な原作を、フランス人の女性監督パスカル・フェランが4度目に監督したこの作品について、フランス人がこぞって応援したのは、イギリスへの対抗上当然のこと……？ そう考えると、この映画がセザール賞5部門を受賞したというのも、ある意味「フランスの国威発揚のため」と、私などはつい勘ぐってしまうのだが……。

## 良くも悪くも女性監督の映画……？

4度目に映画化されたこの『チャタレー夫人の恋人』の見どころは、もちろんセックスシーン……？ そう期待してこの映画を観にきた多くのスケベ親父たちは、「何だ、この程度か……？」と失望する可能性が大……？

今や日本でも、渡辺淳一の原作『失樂園』や『愛の流刑地』におけるセックスシーンそして団鬼六原作の『花と蛇』などが映画界に広まっているため、男性・女性を問

わず、日本人観客の性愛映画に対する目が肥えてきているのは当たり前。そんな視点から、女性監督のパスカル・フェランによって4度目に映画化された『チャタレー夫人の恋人』の性愛シーンを観ると、「何だ、この程度か……」というあっけないものが多いかも……？

日本人に比べてイギリス人（フランス人？）は性行動が直線的で即物的なのかもしれないが、服を脱がせるわけでもなく前戯を楽しむわけでもなく、ただパンツを脱がせて挿入し、「三こすり半」とまでは言わないまでも、ごく数回のピストン運動で発射終了という性愛は、杉本彩主演の『花と蛇』（04年）や『花と蛇2 パリ／静子』（05年）、坂上香織主演の『紅薔薇夫人』（06年）そして黄金咲ちひろ主演の『鬼の花宴』（07年）など、団鬼六原作のSM性愛の世界を堪能してきた私（？）には、性愛表現、性愛テクニクとしてはきわめて不十分かつ不満足なもの……？

逆にいえば、何度も登場するチャタレー夫人（マリナ・ハンズ）と猟番パーキン（ジャン＝ルイ・クロック）とのセックスシーンは、バリエーションこそいろいろと変化させているものの、きわめて淡白なもの……？ 団鬼六が描く日本人のセックスですら、あれほど濃厚かつ長時間にわたるものなのだから、日本人よりも体力も性欲も強いはずのイギリス人（フランス人？）のセックスはもっと濃密なのでは……？ そういう意味において、4度目の『チャタレー夫人の恋人』の映画化は、良くも悪くも女性監督の映画……？

## 🎬 『チャタレー夫人の恋人』はもう古い……？

D.H. ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』は「20世紀最高の性愛文学」と称えられており、もちろん私もそれを否定するつもりは全くない。また、プレスシートには、パスカル・フェランの『『チャタレー夫人の恋人』の3つのヴァージョン』とD.H. ロレンス研究者である武藤浩史氏の「映画『レディ・チャタレー』と小説『チャタレー夫人の恋人』」があり、両者とも文学部の学生向けには最適の解説……？

しかし、この小説がそのように評価されたのは、私の独断と偏見によれば、何よりもその時代的先駆性のため。つまり、性愛表現を公にすることは恥ずかしいと考えられていた1920年代という時代に、これほど赤裸々に性愛表現をしてみせたことにこの小説の最大の意義があるわけだ。プレスシートにある、1927年4月12日付のナンシー・パーンへのD.H. ロレンスの手紙には、「私はいつも同じものを目ざしている。

性的関係を恥ずべきものではなく、健全で、大切なものにする事だ。この小説で、私は最も遠くまで行った。私にとって、この小説は、裸になった自己のように、美しく、優しく、傷つきやすい。」と書かれているが、まさにこの性に関する考え方の先駆性こそがこの小説の生命線……。

しかし、今や性の解放は青天井に広がり、不倫という言葉すら抵抗感がなくなっている状況……？ したがって、いくら21世紀の今、『チャタレー夫人の恋人』の「新解釈」をしたとしても、下半身不随で性的不能の夫をもつ上流階級の妻が下賤な男とのセックスに溺れるという事態は、そこら中にいくらかでもころがっている話……？

ちなみに今面白いのは、離婚した花田勝の元妻美恵子さんが3年前に11歳年下のイケ面俳優兼歌手である青木堅治くん（27歳）と不倫関係にあったというネタ。週刊誌の見出しによると、カーセックスで「あの声」を花田勝に聞かせたとまで生々しく書かれていたが、そんな下ネタの話題が面白おかしく日本中を駆けめぐっている今の時代状況においては、もはや『チャタレー夫人の恋人』は古い……？

## ストーリーはわりと単純……？

この映画は、チャタレー夫人がある日森の猟番パーキンのいる小屋にある伝言を届けたことがきっかけとなり、何度かこの小屋を訪れているうち、なるべくして2人の性的関係が始まっていく姿が描かれる。そして、その関係は次第に濃密になっていくが、前述のようにその性愛テクニックはわりと幼稚なもの……？ 前半は、そんな2人の出会いと性的関係の深まり具合が淡々と描かれていくだけのストーリーだから、わりと単純。したがって、多少退屈する面も……？

ストーリーに転機が訪れるのは、チャタレー夫人が姉のヒルダ（エレヌ・フィリエール）と共に約1カ月間の旅行に行くことになったこと。つまり、この旅行による1カ月の空白期間中に2人の気持にどのような変化が起きるのがポイント。映画ではさらに、この別離期間中、パーキンの身にある異変が起き、それによって必然的にパーキンの境遇に重大な変化が起きるから、その点にも注目。

他方、猟番をやっているパーキンは日々生活するだけで精一杯だが、チャタレー夫人の方はお金の余裕がある（親の遺産から毎年かなりの金額が入金されているとのこと）ため、これからの人生設計をどう立てていくかという前向きな姿勢が顕著。そこで、チャタレー夫人は自分の資金で農場を買いとり、その経営をパーキンにまかせる



© Maïa Films-Saga Films-Arte France Visa d'exploitation n°110 132-Dépôt légal 2006 Tous droits réservés

という大胆な提案まで……。

映画後半は、そんな2つの論点をめぐって、ストーリーにふくらみが出てくるが……。

### ポイント その1——裸でじゃれ合うシーンは……？

この映画は2時間15分と長いですが、私の観るところ、この映画のポイントは2つ。その1つは映像上のポイントで、デートの回数を重ねるごとに次第に心身共に解放されていく2人が、雨の中素っ裸になって小屋の外に出てじゃれ合うシーン。ふつう、セックス行為において主導権を握るのは男の方だが、このシーンでは明らかにチャタレー夫人の方に主導権が……。

常に心の奥底に、自分を解放させたいという願いをもっているチャタレー夫人は、小屋の入口で雨の降る森を見つめていたかと思うと、突然服を脱ぎ捨て、素っ裸になって飛び出していった。すると、身体中に雨を浴びながら叫び踊っているチャタレー

夫人の姿をみていたパーキンも、続いて同じ行動を……。

こんな映像表現が新しいと思うかどうか、また美しいと思うかどうかはあなた次第だが、1920年代であればともかく、今の視線でみると、この程度の解放は当たり前……？

## ポイント その2——ラストの語らいは……？

2つ目のポイント、そしてこの映画最大のポイントは、ラストシーンに登場する。それは、パーキンが猟番をやめることになったことを前提としたうえで、木陰に座ってのチャタレー夫人とパーキンとの語らいにある。ここで再度提案された、チャタレー夫人の資金で農場を買い、パーキンがその農場主になるというチャタレー夫人の提案に対してパーキンは、「女に養ってもらうつもりはない」「2人の関係はもう終わったんだ」「俺はみんなと同じようにはできない。独りになれないと辛い」と断っていた。ところが2人の語らいの中、そんなパーキンの頑なな姿勢が次第に変化していくのがこの映画のポイント。孤独な猟番の心に、そんな変化が起きたのは一体なぜ……？ あなたには是非それをじっくりと考えてもらいたいものだ。

2人の語らいによってパーキンにこんな心の変化が生まれ、新たな人生設計が組み立てられていく姿をみると、11月4日早朝突如辞任を表明した小沢民主党代表が、役員会をはじめとする多くの党员たちの心を込めた慰留の声の高まりによって（?）、11月6日辞任の撤回をしたのもうなずける……？ いやいや、私には絶対そうは思えないが……。

2007(平成19)年11月6日記